「日々の理科」（第 2398 号） 2021,-2,-4

「雪のあし跡４（カケス）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

雪上のあし跡の中には、同定が難しいものも多い。特に鳥類のあし跡は、似たものが多く、よほどの専門家でないと、あし跡だけで主を特定するのは難しい。

この日も、林道の「わだち」を横切るように、何か小さな生き物のあし跡がついている。わだちに沿うようにキツネのあし跡があり、それをわだちが消しているので、車のほうがあとに通ったとわかる。この程度のことは、ポワロでなくても推理できる。

その「小動物」のあし跡を追って、林の中に入ってみた。右あしと左あしを交互に出しているので、カラ類やスズメのような小型の野鳥ではない。最初はリスのあし跡だと思ったが、林内であし跡が突然消えていた。リスは樹上ではある程度飛べるが、地上から滑空はできない。これは幽霊か鳥類である。幽霊はもともと「足」がなさそうなので、やはり野鳥にちがいない。もう少しはっきり残ったあし跡が見たかった。

しばらく歩くと、雪の浅いところに、はっきりしたあし跡が残っていた。私の長靴と比べてもかなり大きいし、カラ類のように両あしで跳ぶように移動する種類でもない。大きさからしてカラスだろうか？

数日後に正体が判明した。こういう場合、雪の上を歩いている「実体」と「あし跡」の両方を観察する以外に方法はない。正体は「カケス」だった。

カケスは、このあたりにいる野鳥では比較的大型で、ハトと同じぐらいの大きさである。餌場（バードテーブル）でも立場が強く、顔もキリリとして見える。